

展覧会開催のお知らせ

デュフィ展

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

このたび、ギャラリーためながでは「デュフィ展」を開催する運びとなりました。デュフィは軽やかな筆致に豊かな色彩を兼ね合わせた作品を描き、永年人々を魅了してきました。その幸福感に満ち溢れた作品は、観る者に明るく軽やかな高揚感を抱かせる魅力を持っています。生きることの楽しさや喜びを素直に描き上げたデュフィの作品は、今もなお世界中の多くの人々に愛され続けています。

本展覧会は、ギャラリーためながのコレクションを中心に、伊丹市立美術館、鎌倉大谷記念美術館、なかた美術館の貴重な所蔵品を交え、40余点を展覧いたします。音楽一家に育ち、幼少より音楽に親しんだデュフィならではのオーケストラやヴァイオリンをモチーフにした室内画、ニースなどの南仏や競馬場の風景などデュフィの魅力を十分に味わっていただければ幸いです。

ギャラリーためながは1969年の開廊以来、多くのデュフィ作品を取り扱ってまいりました。私共にとっても馴染みの深い作家、デュフィの厳選された作品を、是非皆様にご高覧賜りますようご案内申し上げます。

RAOUL DUFY (1877-1953)

近代フランス絵画を代表する画家の一人であるラウル・デュフィは、1877年ノルマンディー地方の港町ル・アーヴルに生まれました。青年期にマティスやヴラマンク、ドラン、マルケラとともにフォーヴィスムへ加わり、続いてキュビズムを参考にしつつ他にみられない描写法を確立し、独自の明るく喜びに満ち溢れた作品を多く残しました。

港町に生まれたデュフィは生涯海を愛し、海をテーマにした作品を多く描きました。とりわけ1920年代後半から晩年にかけて制作した南仏ニースは妻の出身地であるとともに彼にとって最も愛した場所の一つでした。競馬もまたデュフィの画歴の中で多様な展開を見せる主題でありました。作品は光を色彩によって表すことで、競馬場と観衆が醸し出す華やかで特別な雰囲気を見事に再現し、独自のスタイルへと昇華していきました。さらにデュフィの作品に繰り返し登場するもうひとつのテーマは音楽です。音楽一家に育ち、自らも趣味でヴァイオリンを演奏した彼のこのテーマへの関心は深く、時には作曲家へのオマージュとして、あるいは音の芸術への賛美として、美しい色彩の世界を奏でました。また、1937年にはパリ万国博覧会電気館のために巨大な壁画《電気の精》10×60mを制作し、その翌年にはシャイヨー宮劇場付属のバーのための大規模なデザインを担当するなど公式の注文にもいかにその力を発揮しました。スケールの大きい空間に対する天性の感覚は軽やかなタッチを失うことなく壮大な作品を創造し、彼の評価を一層高めたことは言うまでもありません。1952年の第26回ヴェネツィア・ビエンナーレにはフランス代表として41点の作品を出品し、絵画部門でのグランプリを受賞し、その類まれな才能は名実ともに世界に高く評価をされました。

【展覧会概要】「Raoul Dufy -ラウル・デュフィ展-」

■ギャラリーためなが東京

※ 2010年11/13(土)～12/11(土) 11/11(木)レセプション(招待者のみ)

開廊時間:10:00～19:00 日・祝休廊 画廊ホームページ www.tamenaga.com

東京都中央区銀座7-5-4 TEL:03-3573-5368 / FAX:03-3573-5468

東京広報:蔵野 E-mail:kurano@tamenaga.com

■ギャラリーためなが大阪

2010年10/10(日)～11/7(日) ※レセプション10/10(日)16:00～

開廊時間:11:00～20:00 年中無休 画廊ホームページ www.tamenaga.com

大阪市中央区城見1-4-1 ホテルニューオータニ大阪1F TEL:06-6949-3434 / FAX:06-6949-3930

大阪広報:西山 E-mail:ncb@tamenaga.com

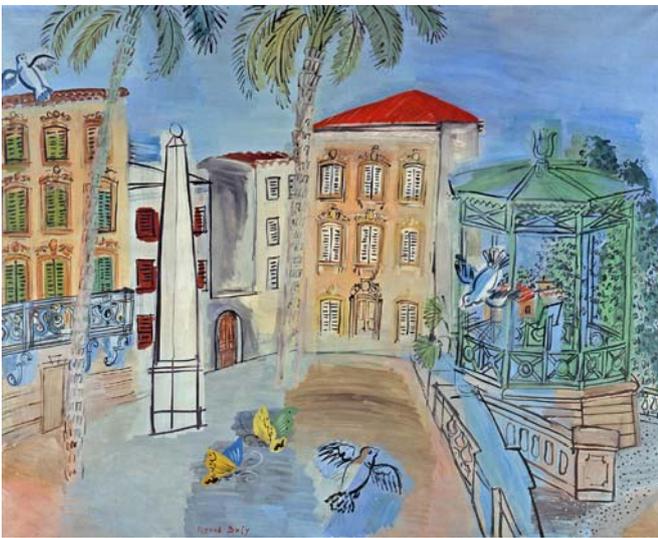
油 彩



《ドーヴィルの競馬場》 53x130 cm

1931 年制作

競馬場の光景は、デュフィが好んで描いた主題のひとつであります。これらの多くは、1930～1940 年代に描かれており、フランスでは、ドーヴィル、ロンシャン、イギリスではアスコット、エプソム、グッドウッドの競馬場を描いたものが大半を占めています。競馬場を好んで描いたという意味では、マネ、ドガ、ロートレックなどに繋がりますが、デュフィは彼らとは一味違う絵画の世界を展開したといえ、デュフィの関心は、競走馬のスピード感や馬の動態をとらえるというよりも、競馬場と華やかな観衆が放つ特別な雰囲気を見事に再現していきました。



《オペリスクと音楽堂》 130x162 cm

1927 年制作

デュフィには、アマチュアやプロの音楽家を兄弟に持ち、自身もヴァイオリンを演奏するなど若い頃から音楽的環境に育った彼は、音楽の行われる場所ならどこにでも関心を抱いたといえます。彼の描く音楽シリーズには、シンフォニー・オーケストラの演奏風景を全体的にとらえたものや、金管や弦楽などの室内楽団を描いたもの、楽譜や楽器だけを描いたものがあります。彼の作品の 10 分の1以上は音楽の世界に題材を求めたものであり、その世界観を完全なまでに伝えています。



《クロード・ロランに捧ぐ》 46x38 cm

1927～29 年制作

デュフィは「クロード・ロランは私の神だ」と述懐したことがあるように 17 世紀の画家クロード・ロランに最大の敬意を払っていました。イエール（ヴァール県）の泉水をロランにふさわしい海、宮殿、港にあわせて賛辞の印として描きました。黄金の光の画家ロランを称えるその作品でありながら、デュフィはあえて、印象派の作家たちが誰も使わなかった黒色を主体に作画し、彼は黒色を光の真の発光源として考えたのです。すなわち、デュフィの作品にしばしば登場する黒色は影を意味するものではなく、光の色をめざしたものでありました。



《セヌ、シャイヨー宮のプロジェクト》水彩 50x65 cm

1938 年制作

1937 年の万国博覧会に飾る《電気の子》を構想中の 1936 年に、デュフィは同じく万国博覧会の下に行われるプロジェクトの依頼をもう一つ受けました。それは、シャイヨー宮に新設される劇場の喫煙室兼バーの半円形の空間を装飾するという内容でありました。デュフィの作品《セヌ川、パリから海》(現在《セヌ、オーズ、マルヌ》として知られている)は、リエスに製作依頼された《セヌ川、水源からパリ》と対を成す作品で、三枚のパネルで構成されていました。本展では、このプロジェクトのための習作を出品致します。



《裸婦》水彩 72.5x54.5 cm

1925～1930 年制作



《ヴェニス サンマルコ広場》水彩 50x65 cm

1938 年制作